

大阪商業大学学術情報リポジトリ

トルコ分割とイラン再分割ー1915年の西南アジアー

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水田, 正史, MIZUTA, Masashi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/479

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



[研究ノート]

トルコ分割とイラン再分割

— 1915年の西南アジア —

水田正史

はじめに

- 1 ジャンダルメリー：イギリスの圧力によるイランにおける武力創設とその武力の反イギリス化
- 2 ペルシャ湾とその奥：石油/バグダード/イラン縦貫通商路
 - (1) 石油：イギリスの死活にかかわる権益
 - (2) イギリスにとってのメソポタミアの泥沼化：イギリスによるバグダード奪取の失敗とクートルアマーラへの撤収
 - (3) プーシェフル：イランにおけるイギリスの最後の拠点
- 3 ドイツの「インドへの道」とイギリス、ロシアによるインド防衛
- 4 コンスタンティノーブル協定：トルコ帝国分割とイラン再分割
- 5 アラブ諸勢力の親イギリスの旗幟の鮮明化
 - (1) コックス：イギリスとアラブ諸勢力との友好関係構築
 - (2) メッカの沈黙
 - (3) ジュラーブの戦いからイギリス・アブドゥルアズィーズ間の条約締結へ
- 6 イランの混沌
 - (1) イランにおける同盟側の攻勢：1月～4月
 - (2) イギリス、ロシアのイランへの金融的挺入れ：「モラトリアム」という名の助成金
 - (3) モハーージェラート：中央政府のテヘラーン脱出

おわりに

はじめに

本稿は1915年の西南アジアの激動を簡単にまとめたものであり、すでに発表した1914年のイランと1916～1917年の西南アジアをそれぞれ扱った拙稿（[水田2007a]と[水田2007b]）を結びつける位置に位置するものである。問題の所在などについては、これら両稿の「はじめに」に述べたことに尽きているので、ここに繰り返すことはしない。

1 ジェンダルメリー：イギリスの圧力によるイランにおける武力創設と その武力の反イギリス化

1915年初め、200名ほどのドイツの工作員がイランに潜入した。ドイツのイランにおける工作は大戦期を通じてイギリスを悩ませることになるが、その背景として指摘することができるのが、イランの人々の中に広範に存在する親ドイツ感情と、ジェンダルメリーという武装組織の存在である。

まず、親ドイツ感情から見ていくことにしよう。これには、次のような理由が考えられる。

第1に、敵の敵は味方、という論理である。すなわち、ドイツは、イランの敵であるロシアの敵であった。

第2に、ムスリム国であるトルコがドイツ側に立って参戦したという事実である。

第3に、戦争初期の、西部戦線および東部戦線におけるドイツの軍事的成功である [Wright 1977 : 171-172]。

ジェンダルメリーは1910年に設立された部隊である。当時の時代状況から説き起こすことにしよう。

1911年以来の北部におけるロシアの支配については別稿で述べた通りである。そこでは、ロシア軍やコサック旅団の存在のゆえに、表面上のものであれそれなりの治安が維持されていた。それに対して南部では「表面上の治安」さえ存在しなかった。無政府状態といっても過言ではなかった。バフティヤリー、ガシュガーイー、アラブ（シェイフ・ハズアルを長とする）などの諸部族が実質的な自治を享受しており、盗賊が通商を大きく害していた。シーラーズ以南ペルシャ湾に至る地域では盗賊の頭目たちあるいは部族長たちが高い「関税」をかけ、イギリスを悩ませた。

イギリスは、ロシアとはちがって、占領という解決策はとらなかった。イギリスの解決策は、第1に、海軍による軍事行動（1909年、1911年、1913年）であり、第2に、地元部族長たちを味方につけることであった。たとえば、イギリスはモハンマレの首長であるシェイフ・ハズアルと、そしてバフティヤリーとのあいだで、彼らの実質的自治をイギリスが認めるという協定を結んだ。イラン政府の意向に反してであった。つまり、ここにおいてイラン中央政府は存在しないに等しい。バフティヤリーのみならずモハンマレのアラブも「国の中の国」であったのである。

また、イギリスは、ガシュガーイーの部族長を、よりイギリスに好都合な人物にすぎかえようとするなど、部族の「内政」に干渉した。

だが、このような政策は、外国の内政の込み入った事情に通じていなければならないという困難を必然的に伴い、また、ある勢力の、疑わしい支持を大前提としている点で、不確かなものであった。そして、いうまでもなく、内政干渉ということでイラン「国民」の反感を買う恐れが十分にあった [Olson 1984 : 20-21]。

そこでイギリスは、何らかの部隊の創設をイランに要求した。そして、イギリスはロシアの支持を得て、これを今後の借款供与の条件とし、更には、もし南部で治安が回復されないならば自らが部隊を編成し指揮する、と脅しさえした。もちろん、イラン政府として

も国内の治安維持は重大な関心事であり、そのための部隊の創設の必要性も認識していた。

このようなことを背景に、1910年7月に成立したモストウフィヨルママーレクを首班とする民主党系の政権は、外国人将校の指揮下の国内治安維持部隊の創設に目を向けた。このようにしてジャンダルメリー（以下に述べる国庫ジャンダルメリーと区別して政府ジャンダルメリー）は誕生した。

民主党はかねてより、財政改革と中央集権化を達成し外国軍隊を追い払うために軍隊を組織することが必要だということを、自らの主要課題として公に、そして繰り返し主張していた。政府ジャンダルメリーは国内の道路上の治安維持のためにつくられた部隊であったが、軍の改革が当面進みそうにないという情勢の下、やがてその本来の役割を越えて、軍隊に準ずる組織へと発展していき、政治的にもその重要性を増していくことになる。

政府ジャンダルメリーの創設の問題は、より広範な改革プログラムの一部をなすものでもあった。1910年12月にマジュレス（国民議会）が可決した全般的改革案により、イラン政府は、イタリアにジャンダルメリーの教官を、アメリカに財政専門家を、フランスに内務省および法務省への補佐を派遣するよう依頼した。しかし、イタリア政府は、イギリスとロシアがイタリアは強国であるとしてこれに反対しているということを知るや、イラン政府の度重なる依頼を断った。そこでイラン政府は「小国」スエーデンに依頼することにしたのであった [Cronin 1997 : 20-21]。

このようにして、1911年8月、ヤルマシオン (Hjalmar O. Hjalmarson) 率いるスエーデンの軍事使節団がテヘラーンに到着した。彼らの任務は、イラン内務省の下で組織されるジャンダルメリーを教え、指揮することであった。

一方、この間、この同じ全般的改革案に基づいて財政改革のためにイランにやってきたアメリカ人財務長官シャスター (W. Morgan Shuster) も、部隊を組織する計画を推し進めていた。この部隊は、徴税にあたる官吏を助けるためのものであり、彼の直接的指揮下に置かれ、国庫ジャンダルメリーと呼ばれた。

シャスターは国内外の、特にロシアの敵意により着任後1年を経ずしてイランを去ることを余儀なくされ、これに伴い国庫ジャンダルメリーは解体するが、その将兵は政府ジャンダルメリーへと移っていった。国庫ジャンダルメリーは、シャスターが民主党に近かったことなどのゆえに、親民主党的、民族主義的、反ロシア的性格を有していた。したがって、国庫ジャンダルメリーの将兵の政府ジャンダルメリーへの転入は、このような性格を後者に持ち込むことになった。

転入した将兵は1000名以上を数え、その後の増員も加え、政府ジャンダルメリーの規模は1912年末には約3000名、13年末には約6000名にまで増大していった [Cronin 1997 : 19-21, Cronin 2000 : 399, Shuster 1912 : 98, 182]。

したがって、ジャンダルメリーの経費も増えていき、それはこの時期、主にイギリス、ロシアからの借款でまかなわれていた。特にイギリスの財政的・政治的支持はジャンダルメリーにとって不可欠のものであり、その首都以外での活動も、イギリスの圧力のもと、南部に向けられた。しかし、規模が大きくなるにつれて、それは、1907年英露協商でロシア勢力圏とされた地域にも活動を広げようとし、ロシアの敵意と敵対を招いた。ジャンダ

ルメリーがタブリーズ、ラシュト、マシュハドといった北部の代表的諸都市に根をおろすことができたのは、ロシアの11月革命の後になってのことであった。

第1次世界大戦勃発はジャンダルメリーの歴史にとっての分水嶺であった。

第1に、スエーデン政府が将校を引き上げた（全員ではないと思われる）。これにより、部隊内のペルシャ人将校の力が大きくなった。

2番目は金融面での変化であった。外国からの借款が得られなくなり、ほぼ破産状態とあっていいペルシャ政府には財政的余裕はなく、そこでジャンダルメリーはドイツに資金を求めることになった。

第3に、同部隊が政治化し、民主党、民族主義者、それにドイツと結びついたことである。イランの民族主義者たちは、かねてよりイギリスおよびロシアへのカウンターバランス（勢力相殺勢力）をさがしていた。彼らはまずアメリカに目を向けるがうまくいかず、戦争がはじまるやドイツに注目するようになる。彼らは、イギリスとロシアを抑えイランの独立性を高めるであろうという点でドイツの勝利を望んだ。このようにして、ジャンダルメリーは開戦後数ヶ月の内にイギリスとのつながりを決定的に断ち切った [Cronin 2000: 400]。

イギリスの要求によって生まれたジャンダルメリーは、さして時日を経ずして反イギリス勢力へと転化したのであった——それも南部において。

2 ペルシャ湾とその奥：石油/バグダード/イラン縦貫通商路

(1) 石油：イギリスの死活にかかわる権益

イギリスは開戦当初より、ペルシャ湾の奥における自らの死活にかかわる権益を守る決意であった。この目的のために1914年11月、小規模な部隊がインドから海路派遣された。同部隊はアーバーダーン製油所を守るための小部隊を上陸させた後、トルコからファオとバスラを奪取した。なお、現在イラクという国家が存在するこの地域は、当時オスマン・トルコ領であった。

1915年1月末、トルコ軍とアラブ部族民たちが、アフヴァーズおよび油田地帯をめぐってイラン領に侵入した。これに対して、インド人の大隊がドーセットシャー連隊の30名とともに、アフヴァーズを守りアラブ諸部族の「士気を回復する」ためバスラからカールー川を遡った。

だが、こうした動きにもかかわらず、トルコに雇われたアラブ人は、複数の地点でパイプラインを切断することに成功し、それを3か月以上にわたって使用不能にした。

ここに至って、今や1万2000名に達していたイギリス軍はイラン領内に入り、油田防衛のためにアフヴァーズを占領した。彼らはトルコとそのアラブ人同盟者をフーズスターンから追い払うのに成功した。その後、終戦まで同地方においてイギリスにとってこれといった困難は発生しなかった。それは、このイギリス軍の存在、それにシェイフ・ハズアルと一部のバフティヤリーのハーン（首長）たちの支持によるものであった。

イランの油田とアーバーダーン製油所はイギリス海軍の死命を制する重要なものであっ

た [PGHS : vol.1,20,Wright 1977 : 171-172]。インド副王などを務め、1919年に外務大臣に就任するカーゾン卿 (George N. Curzon, First Marquess of Kedleston) が1918年に、「連合側は石油の波に乗って戦争に勝利した」と述べたという事実をここに紹介しておこう (The Times, 22, November, 1918)。

(2) イギリスにとってのメソポタミアの泥沼化：イギリスによるバグダード奪取の失敗とクートルアマーラへの撤収

インドから派遣されペルシャ湾奥に上陸したイギリス軍は、イランの油田の防衛のみを行なったわけではなかった。

イラク (メソポタミア) は、バグダード鉄道に見られる通り、ドイツの東方への進出の通路にして舞台でもあった。ファオとバスラをトルコから奪取したイギリスの遠征軍にとって、バグダードはきわめて魅力的な獲物であった。もしこの都市を手に入れることができれば、戦争終了後の国境線の引き直しの際にイギリスにとっての非常に大きな好材料となるにちがいがなかった。また、いうまでもなく、戦争の行方という点でもそうであった。バグダードへのイギリスの最初の進撃は1915年11月に始まった (2度目は1917年1月2日)。

トルコとドイツの権益が、特にイラン西部への道が危険にさらされた。トルコは、ダーダネルス海峡での成功によって生まれが余裕を、援軍としてメソポタミアへ差し向けた。

イギリスは11月25日、バグダードから目と鼻の先にあるクテスيفونでの戦いに勝利しクートルアマーラに撤収した。

バグダードを陥れるにはイギリスの兵力は小さすぎた。そしてイギリス軍はこのクートルアマーラにおいてトルコ軍に包囲されることになる (12月7日～翌年4月29日)。このような泥沼にはまり込んでしまうことになってしまい、メソポタミアはイギリスにとって無視しえない、そしてバスラなど南部に局限しえない戦争地域へと転化することとなった [PGHS : vol.1, 14]。

(3) ブーシェフル：イランにおけるイギリスの最後の拠点

もちろん、ペルシャ湾地域におけるイギリスの関心は石油とバグダードにとどまらなかった。

「1915年5月、ブーシェフルの後背地とシーラーズとテヘラーンの状況がかなり悪化した時、イギリス政府はペルシャ内陸部をなるがままに放置し、当分のあいだブーシェフル半島の保持に全力を集中することに決めた。7月、ブーシェフルの町が、ドイツの影響下にある諸部族によって攻撃されたが、〔奪取は〕失敗に終わった。8月、この町と半島がインドからの諸部隊によって占領された。ペルシャ湾からの主要貿易ルートは、ブーシェフルからシーラーズへと、そして同地からペルシャを貫いて中央アジアへと通っていく。したがって、ブーシェフルはこの上なく重要な地点であり、ドイツにそそのかされての攻撃が、成功しなかったものの、繰り返し行なわれた。ペルシャ政府としても、我が軍の同半島からの撤退を交渉する努力を執拗に行なった。だが、我が政府が断固として主張した条件には、シーラーズ道の治安の回復が含まれており、そして、このことが保証されえな

ったので、我々は占領しつづけた。」[PGHS：vol.1,20]

こうした、イラン南部における諸部族の反イギリス武装行動の背後にいたのが、「アラビアのロレンス」ならぬ「ペルシャのヴァスマス」として知られるヴァスマス（Wilhelm Wassmuss）であった。

3 ドイツの「インドへの道」とイギリス、ロシアによるインド防衛

ドイツのイランにおける活動のもう1本の柱は、インドに達することであった。

イギリスとロシアは、これを撃退するため、のちに東ペルシャ哨兵線（East Persia Cordon）として知られることになる哨兵線を創設することによってイラン東部国境を封鎖することに決めた。イギリス軍がイラン領バルーチスターンとスイースターンに入り、イギリス領バルーチスターンのヌシュキから北へビールジャンドを経てガーエンまで（PGHS：vol.1,20では「インド洋からビールジャンドまで」）の線に詰めた。そこから北はロシアが担当した [PGHS：vol.1,20, Wright 1977：173]。

ドイツ人工作員の中にアフガニスタンへの到達に成功する者たちがいた。

この遠征はドイツの一般幕僚で考え出されたものであり、その目的は「インドに革命をもたらし、アフガニスタンを、インドを攻撃するように仕向け、イランをオスマン帝国とインドとをつなぐ橋として確保すること」であった。主なメンバーは、若き外交官ヘンティッヒ（Werner Otto von Hentig）とニーダーマイヤー大尉（Osker von Niedermayer）であった。トルコ人将校1名、インド人革命家2名、それに捕虜収容所から連れて来られたパシュトゥン人（アフガニスタンの主要民族）複数名も同行していた。

ヘンティッヒはドイツ皇帝からの——と称する——無署名の手紙とベートマン・ホルヴェーク（Theobald von Bethman-Hollweg）首相のメッセージを携えていた。彼はアフガニスタンとのあいだで外交関係を樹立し、友好条約あるいはできれば同盟（alliance）を結ぶとの任を帯びていた。ニーダーマイヤーは軍事問題を話し合うことに、そして、インド人たちは反イギリスの戦いへのアミール（首長 [ここではアフガニスタンのそれ]）の支持を請うことになっていた。トルコ人将校の任務は、スルタン・カリフとオスマン戦時政府指導者からのメッセージを伝えることであった。

遠征隊はイランから1915年8月、アフガニスタンに入り、5週間後、カーブルに達した。

アミールの究極の忠誠はオスマンのスルタン・カリフに対するものであったが、他方で、彼はイギリスの力を十分に認識しており、したがって向こう見ずの冒険に走りたくはなかった。そこで彼は次のような策をとった。すなわち、ドイツが勝利した場合にのみ可能となるような、途方もなく大きな金融的・軍事的支援を内容とする条約の草案に、非公式の承認として頭文字で署名する、という策である。

遠征隊は1916年5月に解散した。この遠征は、アフガニスタン・ドイツ間の最初の外交的接触であり、アフガニスタンの対ヨーロッパ関係の面でのイギリスの独占の打破の開始を告げるものであった。

なお、ヘンティッヒは1970年、時の国王ザーヒル・シャー（在位1933～73年）の招きで

アフガニスタンを訪れている。一方、ニーダーマイヤーは1922年のラパッコ条約により、ソ連において赤軍の近代化に携わった。第2次世界大戦後、東ヨーロッパでソヴィエト軍につかまり、モスクワの監獄で1945年ごろに死亡した [Adamec 1997: 144-145, 235-236]。

アフガニスタンのほかにも、たとえばツークマイヤー (Zugmayer) という人物がイギリス領バルーチスタンへの潜入に成功した。また、マクラーン (オマーン湾北岸) で紛争を扇動した者たちもいた。なお、彼らドイツ人工作員たちは、ロシアから逃れてきたオーストリアとドイツの捕虜、トルコ人、インド軍からの脱走兵、現地で徴募した「イラン人」兵士たちの手助けを得ていた [Wright 1977: 173]。細かいことのように思われるかもしれないが、この時期のこの地域の混沌とした状況が集約された事実であるといえよう。

ドイツ人たちの活動は非常に粘り強いものであった。それは、イギリスが終戦前には東ペルシャ哨兵線を東ペルシャ野戦軍 (East Persia Field Force) へと格上げしなければならないほどであった [PGHS: vol.1,20]。

だが、ドイツ人たちは結局は、インドに革命をもたらし云々というその目的を達することはできなかった。イランを東へとブレイクスルーすることには成功したが、到達したインド周縁部において、インド本体を、したがってイギリス帝国を震撼させることはできなかったのもであった

4 コンスタンティノーブル協定：トルコ分割とイラン再分割

このようにイランは独立国としての体をまったくなしていなかった。中立国ではあったかもしれない。しかし、それは、常識的な意味でのそれではなく、一方の側からではなく双方から侵略されているがゆえにそれぞれの勢力が相殺されるという意味での擬似的中立であった。そもそも、中立国の中に中立圏 (1907年英露協商) があるということからして概念矛盾である。この中立圏がロシア勢力圏、イギリス勢力圏よりも「中立的」であったかという点、そうでもないであろう。それはともかくとして、この中立圏も消え去ることになる。

それは、1915年3月から4月にかけてのコンスタンティノーブル協定によってであった。「3月から4月にかけて」という表現から察せられるように、この協定は1つの法律文書として作成されたものではなく、この5週間ほどのあいだにおけるロシア、イギリス、フランス間の外交上のやりとりの総体を指すものである。そして、これはロンドン協定、サイクス・ピコ協定、サン・ジャン・ド・モリエヌ協定とともに、協商諸国によるオスマン帝国分割についての戦時下の秘密協定の1つである [Hurewitz 1956: vol.2,7]。同時にこれは、イラン再分割をもその内容として含んでいたのである。

発端は3月4日のロシア外相からペトログラード駐在英仏両大使に宛てた覚書であった。それは、ロシアは協商側の勝利の暁にはコンスタンティノーブルとボスフォラス・ダーダネルス両海峡を併合したいと望んでいるので理解を求め、という内容であった。そして、「オスマン帝国内の他の地域あるいはそれ [オスマン帝国] 以外に関して」イギリス・フランスが有している企図に同様の理解がロシアから保証される、とも述べられていた。

イギリスとフランスは、ロシアの要求を承認しつつ、それぞれ自らの要求ないし条件を出した。イギリスのそれは、以下の5点にまとめることができる（フランスのそれについては省略）。

- ① ロシアがコンスタンティノープルを併合した場合、同市（港）を、非ロシア領との間を通過する商品の自由港とすること。
- ② これはすでにサゾノフが約束したことだが、海峡を通過する商船の通商上の自由。
- ③ 中立のバルカン諸国を協商側に引き入れることがイギリス政府の主要目的の1つなので、ロシアは、コンスタンティノープルおよび海峡の併合によってブルガリアとルーマニアの懸念を招かないようにし、協力を得られるようにすること。
- ④ 現在トルコ領アジア地域である所におけるイギリスとフランスの将来の利益に関するすべての問題を考慮に入れることが必要である。イスラーム教徒の聖地とアラビアは、いかなることがあっても、独立のイスラーム教徒の領土にとどまるべきである。
- ⑤ 1907年英露協商で中立圏とされた部分をイギリス勢力圏とすること。

この5項目すべてに対して、ロシアは同意した。ただし、④と⑤については、次のような要求ないし条件を述べている。

イスラーム教徒の聖地が、（トルコの）スルタンがカリフの称号を保持したままで（＝スルタン・カリフ）トルコの宗主権のもとにありつづけるのか、あるいは新しい独立国（複数形）を創出するのか明確にしておく必要がある。ロシア政府としては、カリフ位はトルコから切り離すべきであると考え（いずれの場合もメッカ巡礼の自由は完全に確保される）。これが④についてのロシアの主張である。

⑤についてはロシアはイギリスの要求を全部は認められないということを明確に表明している。また、単なる留保条件・付随条件といった程度を超える新たな要求ともいべき主張を行なっている。以下のようにまとめることができよう（アフガニスタンも含める）。

- ①-a エスファハーン市とヤズド市、およびそれらと不可分の一体をなす隣接地域は、ロシアがそこに有する権益にかんがみ、イギリス勢力圏に編入するのではなく、ロシアに残しておくべきである。
- ①-b 現在ロシア・アフガニスタン国境のくさび形をなしゾルファガールにおいてロシア国境に接している中立圏の一部もまた、ロシア勢力圏に含まれなければならない。
- ② 中立圏における鉄道建設はロシア政府にとって、更なる友好的な議論を要する非常に重要な問題である。
- ③ ロシア政府は、自らの勢力圏において完全なる行動の自由を認められることを期待する。特に、その金融政策および経済政策を展開する権利を優先的に享受することを期待する。
- ④ ロシア政府は、昨年の交渉の過程で、その問題についてロシア政府によって表明された願望に従って、ロシアに隣接している北アフガニスタンの問題を、同時に解決することが望ましいと考える [Hurewitz 1956 : vol.2,7-11]。

①-bで「ロシア・アフガニスタン国境のくさび形」云々は現在中立圏にあることが明言されているが、エスファハーンとヤズド云々はそうになっていない。1907年英露協商では境界線は「エスファハーン・ヤズド……を通る」[Hurewitz 1956: vol.1,266]となっていたこと、および、1914年の段階でロシアがエスファハーンにおいて大きな力を持っていたことは別稿で述べた通りである。また、「ロシアに残しておく」という表現にも注目しておきたい。ヤズドについては詳細は不明だが、いずれにしてもこれら両市およびその隣接地域をロシアがいかに重視していたかを①-aは明確に示すものであるといえよう。

③もきわめて重要である。「完全なる行動の自由」というこれ以上ない強い表現が用いられている点を見過ごしてはならない。すなわちこれはロシアによる北イランの「完全な」支配をイギリスに認めさせようとするものなのである。

②と④も含めて、ロシアは、イラン（およびアフガニスタン）に関して、イギリス側の要求をかなり押し返している。ロシアとしては、たとえコンスタンティノーブルおよび海峡との対価（の一部）としてであっても、イラン中立圏全体をそのままイギリスに渡すことはできなかったのである。

5 アラブ諸勢力の親イギリスの旗幟の鮮明化

(1) コックス：イギリスとアラブ諸勢力との友好関係構築

次にこのコンスタンティノーブル協定にも触れられているアラビアの問題を見ていくことにしよう。イギリスがアブドゥルアズィーズ（イブン・サウード）に接近していったことについては別稿でも述べた。その話の続きである。

1914年12月31日、シェークスピア大尉（W.H.I.Shakespear）がナジュドのアブドゥルアズィーズの幕営に到達した [PGHS: vol.1,24]。

彼をアブドゥルアズィーズのもとに派遣したのは、コックス（Percy Zachariah Cox）という人物であった。コックスは戦前、ブーシェフル駐在総領事、ペルシャ湾駐在政務官を務めていた。それ以前にマスカットのスルターンとのあいだの関係修復に活躍したことによってインド副王カーゾンの信頼を勝ち得たのが出世のきっかけであったという。

彼は、他の強国の進出をはばみ、イギリスの戦略的利益を守るためにペルシャ湾岸の現地諸勢力と手を結ぼうとした。たとえば、彼は、モハンマレの首長シェイフ・ハズアルと提携関係を取り結んだ。コックスがシェイフ・ハズアルと初めて会ったのは1905年のことであり、両者は親密な友情で結ばれた。これは第1次世界大戦中を通じてイギリスにとって大変大きな財産であることがのちに明らかになる。シェイフ・ハズアルの領地はペルシャ湾の支配とアングロ・ペルシャ石油会社の展開にとって戦略的に重要な地点に位置していた。領地内のアーバーダーンに精油所を、そしてそこを油田をつなぐパイプラインを建設する許可をシェイフ・ハズアルが同社に与えた合意に至る困難な交渉を行なったのはコックスであった。

また、彼はアブドゥルアズィーズやクエートのシャイフ・ムバーラクからも信頼されていた。

1914年4月6日、彼はボンベイのインド政庁の外務局長（secretary of the foreign department）に任命される。大戦が勃発するや、彼は、メソポタミア遠征部隊の駐在政務長（chief political officer）となる [Bell 1927 : vol.2, 506-507, Safiri 1993 : 389]。

(2) メッカの沈黙

さて、1914年大晦日にアブドゥルアズィーズの幕営に到着したシェークスピアは以下の2点を知ることになる。

- ① アブドゥルアズィーズは、イギリス政府とのあいだの拘束力のある条約を確保するまでは中立を維持する決意であるということ。
- ② 彼が求めているのは、事実上のイギリスの宗主権の下で自分の地位が確実に保証されることであるということ。

年が明けて1915年1月4日、シェークスピアはコックスに、アブドゥルアズィーズが提案した条約の草案の翻訳を送った。アブドゥルアズィーズはこの草案で、前年11月のイギリスの案で提示されたもの以上のものをほとんど要求せず、自分が永久にイギリスの配下（vassal）になると申し出た。

同月17日、アブドゥルアズィーズはメッカのシャリーフの次男から次のような内容の書簡を受け取った。

- ① トルコは（メッカの）シャリーフに、ジハードを宣言して諸部族を召集するようしつこく強要している。
- ② しかし、（メッカの）シャリーフはアブドゥルアズィーズがトルコとイギリスに対してどのような態度をとるか知るまではのらりくらりと対応して時間稼ぎをする。

アブドゥルアズィーズはシェークスピアにこの手紙を読んで聞かせ、どのような返事がイギリスにとって都合がいいか、と尋ねた。その結果、返信は次のような内容となった。

- ① イギリスのジェッダ攻撃の恐れを口実に更に時間稼ぎを続けるように。
- ② 自分自身としてはトルコ側につくことにはいかなる利点も見出せない。
- ③ 自分もトルコの使節団に対して時間稼ぎの返答をしたばかりであり、その際、イブン・ラシードへの軍事行動が差し迫っていることとイギリスがカティーフを攻撃する恐れがあること、この2点を口実にした。

このアブドゥルアズィーズの対応はイギリスにとって大きな価値をもつものであった。タイミングも非常によかった。

メッカのシャリーフは個人的にはイギリス側につきたいという意向をもっていたが、他方では彼の「領土」にはトルコの守備隊が駐留しており、主要都市をおさえていた。この時点では、戦況はいまだ協商側有利にはなっていなかった。

彼がアブドゥルアズィーズからの返信を受け取ったのは、このようなタイミングにおいてであったのである。彼は、アブドゥルアズィーズの助言に従い時間稼ぎをした。イスラム世界の精神的中心たるメッカ。そのシャリーフがいかなる挙に出るか、と指針を求めて注視していた者たちは、結局何も見出せなかった。メッカからはジハードは発せられなかった。前年の開戦時にイスタンブールのスルタン・カリフから発せられたジハードは基本

的にトルコ人たち以外には威信が及ばなかったという点で、トルコにとって期待はずれのものであった。

この臨界的局面における「メッカの沈黙」は全イスラーム的広がりにおいて、さらには世界的広がりにおいて極めて大きな意味をもつものであった [PGHS : vol.1,24]。

(3) ジュラーブの戦いからイギリス・アブドゥルアズィーズ間の条約締結へ

さて、アブドゥルアズィーズはまだイギリス支持の態度を明らかにしてはいなかったが、敵であるイブン・ラシードとの衝突が1月初め、再び始まった。イブン・ラシードは親トルコの部族連合を率い、ナジュド北部にすでに侵入していた。両勢力は1月24日、ジュラーブにて激突した。これは、兵力においてもその損傷数においても、アラビア史上最大の戦いの1つであった。なお、この戦いの場にシェークスピアがおり、死亡してしまう [Bell 1927 : vol.2,509, PGAR : vol.7,1915,53,1916,78, PGHS : vol.1,24] ⁽¹⁾。

戦いは結局引き分けに終わったが、これはこれでイギリスとしては満足のいく結果であった。というのは、これによってイブン・ラシードは戦闘力を失い、トルコの隊列に加わることができなくなり、したがって、メソポタミアでの初期のキャンペーンに参加することができなくなったからである。もし彼の率いる勢力が加わっていたならば、イギリスにとってかなり大きな困難となったことであろう。6月10日、両者のあいだで正式の講和条約が締結され、これによってイブン・ラシードはカスィーム領有権の主張を放棄した [PGHS : vol.1,24] ⁽²⁾。

さらに、同年のより遅くのことであるが、アブドゥルアズィーズはハサー北部におけるアジュマーン族の、そして南部におけるムッラの反乱に対処しなければならなかった。イギリスがバーレーンから武器等を送り、アブドゥルアズィーズを助けた。10月にはライフル1000丁が与えられ、2万ポンドが貸与された。

このようにアブドゥルアズィーズが面倒な問題に煩わされていたという機会を捉えて、メッカのシャリーフは、子息アブドゥラー指揮下のかなりの兵力をナジュド西部へと送った。この時機を失した侵略の目的は、南カスィームに対する、ヒジャーズのある部族の権利の主張を支持するという政治的なものであった。これはアブドゥルアズィーズを激高させた。彼は、イギリス政府に対し、もしシャリーフの行為を抑えることができないなら、自分がそうすると抗議した。だが、この件では、問題はシャリーフに対するアブドゥルアズィーズの恨みという範囲にとどまり、それ以上に展開していくことはなかった。

アブドゥルアズィーズとイギリス政府とのあいだでの条約締結に向けての交渉が妥結に近づきつつあった。このような条約のイギリス政府にとっての必要性は、すでに1年ほど前の1915年1月30日付のインド省から外務省への情報伝達の中に述べられていた。

(1) PGARは10巻よりなっている。10巻全体を通したページ番号も、各巻のページ番号も付されていないので、このような出典表記の仕方を取る。ここで1915とは1915年についての文書のことであり、その次の53はその文書の53ページのことである。

(2) この条約の英訳が [PGAR : vol.7,1916,80-81] にある。

「〔条約が望まれるのは〕情勢の急迫——それは、彼〔アブドゥルアズィーズ〕との友好のために即座の代価を支払うことを必要としている——からであるのみならず、今の戦争の結果ペルシャ湾において生み出されるであろうバスラにおけるトルコ支配の消滅——このことをイギリス政府は誓うものである——という全般的状況からでもある。その際予想されるのは、ナジュドのアミール〔アブドゥルアズィーズ〕が中央アラビアのみならず、湾岸の帯状の地帯をも支配するに任されるといふ事態である。したがって、平和と秩序のためには、同湾を支配する強国が彼と実効的な条約を結ぶことが必須となろう。それゆえに、彼の要求が満たされる範囲は、彼が行なうと期待される即時的貢献によってのみならず、彼が成功した際に我が物にするであろう、そして、恒久的に疎遠にされた場合に疑いなく行使するであろう危害の潜在力によっても測定されるべきである。」

1915年12月26日、カティーフにおいて、コックスとアブドゥルアズィーズによってこの条約が調印された（インド副王による批准は翌年7月18日）。主な内容は次の通り。

- ① イギリスはイブン・サ우드をナジュド、ハサー、カティーフ、ジュバイルの独立の支配者であることを認める。
- ② イギリスはいかなる外国の強国の侵略に対しても、イブン・サウードを支えることを約束する。
- ③ イブン・サウードは、イギリス政府の同意なくしては、いかなる外国の強国とも関係を取り結ばないことを約束する。
- ④ イブン・サウードは、イギリス政府の同意なくしては、自らの領土のいかなる部分も、いかなる外国の強国あるいはその臣民に割譲せず、売却せず、抵当に入れず、賃貸せず、譲渡しない [PGHS : vol.1,24-25]。

6 イランの混沌

(1) イランにおける同盟側の攻勢：1月～4月

イランのアーザルバーイジャンにおけるトルコとショジャー（つまりその背後のロシア）との衝突であるが——これについては稿を改めて論ずる予定——、1914年12月末にマラーゲ付近でショジャーを打ち破ったトルコはタブリーズへと進撃し、ロシアに撤退を余儀なくさせた（総領事の引き揚げは1月6日）。イギリスとフランスの（総）領事も、そして彼らの同胞も引き揚げた。

これを皮切りに、この1915年はイランにおいて同盟側の成功が目立った年であった。ドイツのエージェントたちの活動やアラブによるアングロ・ペルシャ石油会社のパイプライン切断についてはすでに述べた通りである。ドイツのエージェントのみならず、中央アジアから逃れてきたオーストリア人の戦争捕虜が多数イランへと入り込みはじめた。ドイツのエージェントたちは資金を潤沢に与えられており、それを気前よくつかっていた。イランの人々のあいだで広範に存在した反ロシア感情は、彼らエージェントたちの宣伝活動にとっての肥沃な土壌をなすものであった。西部におけるシューネマン (Schünemann)、

エスファハーンにおけるプヒン (Pugin)、南部におけるヴァスマスは、顕著な成果を上げた [IPD : vol.5,662,723]。

(2) イギリス、ロシアのイランへの金融的挺入れ：「モラトリアム」という名の助成金

こうしたドイツの活動をイラン政府に抑えさせようと、イギリスとロシアはイラン政府に資金面で手を差し伸べた。これが「モラトリアム」と呼ばれるものである。ただし、これは本当の意味でのモラトリアム——すなわち、支払猶予——ではなく、それを装ったものであり、実際は新たな資金供与であった（したがって鍵括弧をつけて表記することにしよう）。なぜわざわざこのような偽装をしたかという点、マジユレスにこの案をまわすのを避けるためであった。マジユレスにまわすということは表沙汰になるということであり、そうなれば、他国からの批判にさらされることになるからであった [IPD : vol.5,695,Olson 1984 : 87,107]。

また、ドイツはこの年、ペルシャ帝国銀行への取付を組織した。これについては別稿（[水田2005]）で詳しく論じた。

(3) モハーージェラート：中央政府のテヘラーン脱出

首都においても地方においてもドイツのエージェントたちが公然と人々を集めて武器を持たせた。そして、ケルマーンシャー地方へのトルコ軍の侵入によって、協商側の領事たちと居留民は避難することを余儀なくされた。これに対して中央政府は無力で、かかる行為を阻止する気がないようであった [IPD : vol.5,723]。

実のところ、中央政府にはそのようなことを行なうための軍事力がなかったのである。ジャンダルメリー内部において、親ドイツのスエーデン人将校たちの兵卒たちへの影響が速やかにあらわれ（数カ月後に中央政府に対して反乱）、したがって、この部隊を頼りにできないということは明白であった。コサック旅団は北部の諸地方に分散しすぎており、兵員数も少なかった。

このようなことから、7月にエイノッドウレ内閣がファルマーンファルマーの弾劾によって倒れると、組閣を行なう者が見出せないまま1カ月が過ぎ去った [IPD : vol.5,723]。この間、ヴァスマスが南部諸部族をしてブーシェフル半島を攻撃せしめることに成功し（7月）、その結果イギリス軍が同半島を占領することになる（8月）ことは前述の通りである。

今や、この国は全土にわたって動揺していた。ジャンダルメリーは俸給の遅配のゆえに益々反逆的になり、バフティヤリーでさえもはや頼りにならず、ロシアには北部の分遣隊を増強する余裕はなかった。サーヴォジボラーグとエスファハーンでロシア領事が殺され、のちにシーラーズにてイギリス副領事が同じ運命を辿った。

テヘラーンでは、イギリス・ロシア両公使の働きかけによって8月、モストウフィヨルマーレク内閣が誕生した。協商側は、金融支援——既存の債務の支払猶予または助成金——を行なうことを検討したが、協商側の立場を強化するための実効ある支援はロシア軍の増強以外にないということが徐々に明らかになりつつあった。

9月には協商側の領事たちと居留民はエスファハーンから退去することを余儀なくされ

た。10月、イギリス・ロシアはイランに支払猶予を与えたが、この出鼻をくじこうと、ドイツがイランに借款供与を申し出た。無力なイラン政府はどうすべきか分からなかった。西部戦線におけるドイツの優勢やイラン全土でのドイツの気前のよい資金散布は、イランを同盟側にとって参戦させるに十分に魅力的であるように見えたが、イラン政府の協商側に対する態度を特徴づけるどころの決断の欠如は、同盟側に対しても同じであった。

結局、神経をすりへらす数カ月を経て、11月、かなりの兵力のロシア軍がアンザリーに上陸したとのニュースに協商側は救われた。このロシア部隊は全速力でカズヴィーンへと進軍し、一部は11月14日、キャラジ——テヘラーンの近く——に達した。その結果、少なくともテヘラーンに関する限り、協商側の立場は回復した。

強者の側につこうと常に思っていたイラン政府は、今や、イギリス・ロシアとの同盟を提案しさえした。だが、ここで状況が動く。次の2点である。

第1に、ヨーロッパの西部・東部両戦線で協商側が振るわなかったこと。

第2に、バグダードへ向かって軍事行動を遂行していたイギリス軍の挫折。

イラン政府は同盟を提案したことを後悔した。

テヘラーンの情勢が再びきわめて危機的となった。というのは、ドイツが、ロシア軍が首都に迫っているという事態をいわば逆手にとって自らの利益を図ろうとしたからであった。すなわち、それは、シャーを促して首都からエスファハーンへと移らせ、政府とマジユレスもエスファハーンへと移させ、そして南イランを反北イランへと扇動しようとするものであった。

首都からの脱出のための大がかりな準備が行なわれ、そして、シャーの出発が公告された。だが、最後の段階でイギリス・ロシア両公使がシャーに考えを変えさせるのに成功した。それは、ロシア軍のキャラジからの撤退を約束することによってであった。

このようにして、シャーはテヘラーンにとどまったが、ドイツ、オーストリア、トルコの外交官たち、国会議員たち、ジャンダルメリーのかんりの部分（スエーデン人将校を含む）がテヘラーンを脱出した。これをペルシャ語でモハージェラート（「移動」に関するアラビア語のペルシャ語形）という。11月25日、キャラジのロシア軍派遣隊は撤退した。

モハージェリー（モハージェラート参加者たち）はゴムに臨時政府を樹立した。だが12月、ロシア軍がゴムへと向かう徒次、サーヴェにてジャンダルメリー隊員たちとの戦いに勝利するや、モハージェリーはエスファハーンへと逃げざるを得なくなった⁽³⁾。

この間、テヘラーンの状況は改善したが、地方の状況は大変悪化していた。シーラーズではジャンダルメリーが狼藉の限りを尽くし、イギリスの領事と居留民たちが捕らえられ、タンゲスターンへと連れ去られた。ペルシャ帝国銀行の店舗が略奪者によって荒らされ、ファールス地方はまったくの無秩序状態にあった。ファールスのみならず、各地で協商国民は退去することを余儀なくされた。2カ所の例外を除いて、イラン南部全域が同盟側のエージェントたちの権力下に入った。例外の2カ所とは、いずれもイギリス軍が守ってい

(3) モハージェラートに関する邦語による研究として、[吉井1986]がある。なお、吉井氏には本稿執筆にあたり貴重なご教示をたまわった。篤く御礼申し上げる。

たブーシェフルとアラベスター南部とであった。

ロシア軍はさらにカーシャーンにまで達し、状況はかなり改善した。12月25日、ファルマーンファルマーが政権を握った。かつては王位を捨てて父に譲ることを欲していたシャーは留まることを決意した。12月30日、反乱ジャンダルメリーのスウェーデン人指揮官エドヴァル（Edwall）大佐が任を解かれた [IPD：vol.5,724]。

おわりに

1915年初め、200名ほどのドイツの工作員がイランに潜入した。その背景には、スウェーデン人将校によって指揮されたジャンダルメリーという部隊の存在とイランの人々の親ドイツ感情とがあった。ジャンダルメリーは、南部の治安の回復・維持のためにイギリスの圧力によって創設されたものであるが、大戦が勃発するや反イギリス勢力へと転化した。

イギリスは開戦当初より、ペルシャ湾の奥における自らの権益を守る決意であり、この目的のためにインドから部隊を派遣し、トルコからファオとバスラを奪取した。これに対してトルコはアングロ・ペルシャ石油会社のパイプラインを切断した。イギリス軍はイラン領内に入り、アフヴァーズを占領し、トルコを追い払うのに成功した。

ペルシャ湾の奥に上陸したイギリス軍の目的はイランの油田の防衛にとどまらなかった。手の届く距離にバグダードという魅力的な獲物があった。1915年11月、イギリスはバグダードめざして進撃するが、奪取するには至らなかった。イギリス軍はクートルアマーラに引き返し、ここでトルコ軍に包囲されてしまう（12月7日～翌年4月29日）。今やメソポタミアはイギリスにとってバスラなど南部に極限しえない戦争地域へと転じたのであった。

ペルシャ湾地域におけるイギリスの関心の焦点としては、上述の石油とバグダード以外に今ひとつ、ブーシェフルを挙げることができる。このイランのペルシャ湾岸の主要貿易港は、シーラーズからテヘラーンへ、さらに中央アジアへとつながっており、その意味で戦略的に非常に重要な地点であった。

1915年8月、イギリスはこの町と半島（ブーシェフルの町は同名の半島にあった）を占領した。ドイツ側もここを繰り返して攻撃した。ここで「ドイツ側」とはドイツ側の地元の部族勢力であり、彼らは「ペルシャのヴァスムス」ことドイツ人ヴァスムスによって操縦されていた。

ドイツのイランにおける活動のもう1つの柱は、イランを通して東方（インドや中央アジア）へと達することであった。もちろん、そうはさせじとイギリス・ロシアは哨兵線を設けるが、これを突破するものもあった。すなわち、ヘンティツヒとニーダーマイヤーを中心とする遠征隊が1915年8月、アフガニスタンに入ることに成功したのであった。だが彼らはインド本体を、したがってイギリス帝国を震撼させることはできなかった。

イランは独立国としての体をまったくなしていなかった。中立国とはいっても、それは形式的・表面的なものにすぎなかった。この中立国の中には1907年英露協商が規定するところの中立圏が存在したが、1915年3月から4月にかけてのコンスタンティノーブル協定によってこの中立圏は消えてしまう。

この秘密協定は、ロシアがコンスタンティノープルを併合し、その代わりにイランにおける中立圏（すべてではない）をイギリス勢力圏とする、ということとその主たる内容の1つとしていた。これは、国際政治の舞台において海峡問題（イスタンブル）とイラン問題とが1つの文脈に統合された重要な事例としてはおそらく最初のものであると考えられる。これは、今日的な意味での「中東世界」の生成を告げるものとして非常に重要な意味をもつといえる。

ペルシャ湾の奥のモハンマレは、イラン領であったがアラブ人の居住地であった。当時、ペルシャ湾岸にあってイギリスの政策を現地で担い指揮していたコックスという人物がいた。彼はモハンマレのアラブ人たちの首長、シェイフ・ハズアルと良好な関係を築くのに成功した。この良好な関係はイギリスにとって大きな財産であった。というのは、シェイフ・ハズアルの領地は、ペルシャ湾の支配とアングロ・ペルシャ石油会社にとって戦略的に非常に重要なところであったからである。コックスはアブドゥルアズィーズやクエートの首長シェイフ・ムバーラクの信頼も勝ち得ていた。大戦が始まるや、コックスはメソポタミア遠征軍の駐在政務長となった。

コックスの命をうけたイギリスの軍人シェークスピアが1914年大晦日、アブドゥルアズィーズの幕営に到着した。アブドゥルアズィーズは自分がイギリスの配下になるという内容の条約の草案を1月4日にシェークスピアに渡し、これをシェークスピアはコックスに送った。

同月、アブドゥルアズィーズはメッカのシャリーフの次男から書簡を受け取った。それは、トルコが、トルコ側に立ってのジハードを宣言して参戦するようしつこく働きかけてきているが、シャリーフとしては、アブドゥルアズィーズがトルコとイギリスのどちら側に立つか明らかになるまではのらりくらりと時間稼ぎをする、という内容のものであった。

アブドゥルアズィーズはシェークスピアにこの手紙を読んで聞かせ、どう返事すべきかと尋ねた。その結果、返信は次のような内容となった。すなわち、自分はトルコ側につくことに何ら利点を見出せず、したがって時間稼ぎをしているので、そちらもさらに時間稼ぎを続けるよう、というものであった。

このアブドゥルアズィーズの対応はイギリスにとって大きな価値をもつものであり、タイミングも非常によかった。イスラーム世界の精神的中心たるメッカのシャリーフがいかなる挙に出るか注視していた者たちは、何も見出すことができなかった。ジハードは宣せられなかったのである。この臨界的局面における「メッカの沈黙」は世界的広がりにおいて極めて大きな意味をもつものであった。

1月初め、アブドゥルアズィーズは親トルコのイブン・ラシードとジュラーブで激突した。これは、アラビア史上、それまでで最も大きな戦いの1つであった。戦いは結局引き分けに終わったが、それはそれでイギリスとしては満足であった。というのは、イブン・ラシードが戦闘力を失い、トルコの隊列に加わることができなくなったからである。6月10日、両者のあいだで講和条約が締結され、これによってイブン・ラシードはカスィーム領有権の主張を放棄した。

さらにアブドゥルアズィーズは、アジュマーン族やムッラ族の反乱に対処しなければな

らなかった。この機会をとらえて、メッカのシャリーフは子息アブドゥッラー指揮下のかなりの兵力をナジュド西部へと送ったが、これはそれ以上の事態の展開を引き起こさなかった。

1915年12月26日、カティーフにおいてコックスとアブドゥルアズィーズによって条約が調印された。それは、イギリスはアブドゥルアズィーズをナジュド、ハサー、カティーフ、ジュバイルの独立の支配者であることを認め、外国がアブドゥルアズィーズの領地に侵略した場合にはアブドゥルアズィーズを支える、といったことを主たる内容としていた。

1915年はイランにおいて同盟側の成功が目立った年であった。ドイツのエージェントのみならず、中央アジアから逃れてきたオーストリアの戦争捕虜が多数イランに入り込んだ。ドイツのエージェントたちは資金を潤沢に与えられていた。また、イランの人々のあいだに広範に反ロシア感情が存在していたことが、彼らの活動を助けた。

こうしたドイツの活動をイラン政府に抑えさせようと、イギリスとロシアはイラン政府に資金面で手を差し伸べた。この資金供与を、イギリスとロシアは支払猶予を装って行なった。この案件がマジレスにまわされ表沙汰になるのを避けるためであった。

首都においても地方においてもドイツのエージェントたちが公然と人々に武器を提供した。トルコ軍がケルマーンシャー地方に侵入したため、協商側の領事や居留民たちは避難を余儀なくされた。これに対して、中央政府は無力であった。頼るべき十分な軍事力が存在しなかったのである。ジャンダルメリーは親ドイツのスエーデン人将校たちの影響が兵卒たちにまで及び、コサック旅団は諸地方に分散しすぎており、兵員数も少なかった。7月に内閣が倒れ、組閣を行なうものが見出せないまま1カ月が過ぎ去った。今やこの国は全土にわたって動揺していた。

テヘラーンでは、イギリス・ロシア両公使の働きかけによって8月に新内閣が誕生した。協商側の領事や居留民たちがエスファハーンから退去した。ヨーロッパの西部戦線におけるドイツの優勢やイラン全土でのドイツの気前のよい資金散布は、イラン政府をして同盟側に立っての参戦を決断せしめるのに十分であるように思われたが、そうはならなかった。

このようにして数カ月、神経をすり減らす状態が続いたが、11月、ロシア軍がアンザリーに上陸したとのニュースに協商側は救われた。ロシア軍はテヘラーン近くのキャラジにまで進軍し、これによって少なくともテヘラーンに関する限りは協商側は立場を回復した。

このため、イラン政府は協商側に立っての参戦を提案した。だが、ここで状況が動く。すなわち、第1に、ヨーロッパの西部・東部両戦線で協商側が振るわなかったこと、そして第2に、イギリス軍がバグダード奪取に失敗し、クートルアマーラにおいてトルコ軍によって包囲されたこと、この2点である。イラン政府は協商側に立っての参戦を提案したことを後悔した。

テヘラーンの情勢が再び危機的となった。というのは、ロシア軍が首都に迫っているという事態をドイツが逆手にとって首都をエスファハーンに遷そうとしたのであった。結局シャーはテヘラーンにとどまったが、同盟側の外交官たち、国会議員たち、ジャンダルメリーのかなりの部分がテヘラーンを脱出した。これをペルシャ語でモハーージェラートという。キャラジのロシア軍は撤退した。モハーージェラート参加者たちはゴムに臨時政府を樹

立し、さらにエスファハーンへと移動した。

この間、テヘラーンの状況は改善したが、地方の状況は大変悪化していた。イラン南部のほぼ全域が同盟側のエージェントの影響下に入った。ロシア軍はカーシャーンにまで達した。12月25日、ファルマーン・ファルマーが政権を握り、30日には反乱ジャンダルメリーのスエーデン人指揮官エドヴァル大佐が解任された。

〔付記〕 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号：18530271）による研究成果の一部である。

【文献目録】

- Adamec, Ludwig W., *The Historical Dictionary of Afghanistan*, second edition, Scarecrow, Lanham, Md., 1997
- Bell, Florence, *The Letters of Gertrude Bell*, 2 vols., Ernest Benn, London, 1927
- Cronin, Stephanie, *The Army and the Creation of the Pahlavi State in Iran, 1910-1926*, I.B. Tauris, London, 1997
- "Gendarmerie," In *Encyclopaedia Iranica*, ed. Ehsan Yarshater, vol. 10, fascicle 4, 398-405, Bibliotheca Persica, New York, 2000
- Hurewitz, Jacob Coleman, *Diplomacy in the Near and Middle East*, : Van Nostrand, New York, 1956
- IPD : *Iran Political Diaries, 1881-1965*, 14 vols., Archive Editions, Gerrards Cross, Bucks., 1997
- 水田正史「西暦1915年のイランの財政・金融」『イラン研究』第1号、2005年、135～157ページ
- a「第1次世界大戦勃発時のイラン」『イラン研究』第3号、2007年、208～231ページ
- b「第1次世界大戦と西南アジアの混沌」『大阪商業大学論集』第145号、2007年、49～62ページ
- Olson, W. J., *Anglo-Iranian Relations during World War I*, Frank Cass, London, 1984
- PGAR : *The Persian Gulf Administration Reports, 1873-1947*, 10 vols., Archive Editions, Gerrards Cross, Bucks., 1986
- PGHS : *The Persian Gulf Historical Summaries, 1907-1953*, 4 vols., Archive Editions, Gerrards Cross, Bucks., 1987
- Safiri, Floreeda, "Cox," In *Encyclopaedia Iranica*, ed. Ehsan Yarshater, vol. 6, fascicle 4, 388-390, Mazda, Costa Mesa, Calif., 1993
- Shuster, W. Morgan, *The Strangling of Persia : A Record of European Diplomacy and Oriental Intrigue*, T. Fisher Unwin, London, 1912
- The Times*, London
- Wright, Denis, *The English amongst the Persians*, Heinemann, London, 1977
- 吉井武史「第1次世界大戦期イランにおける民族防衛委員会の活動について」『史泉』第64号、1986年、1～17ページ